

# yucca-note

自然觀察録

No.6

---

2015.6.17 - 2015.10.4

yucca

神秘学遊戯団

yucca-note 2015.6.17

## 仁淀川河口・セグロセキレイ



5月初めの仁淀川河口です。工場も倉庫もない開放感。空、海、浜の抽象画風。河口大橋近くで見かけたセグロセキレイ (*Motacilla grandis*)。しきりに鳴きながら行ったり来たり。野鳥フィールドガイドによると、内陸の湖沼周辺や中流以上の川原に多く、海岸や海に近い川にはほとんどいないとのことですが、そういえば海辺で見たのは初めてのよう。よく似たハクセキレイ (*Motacilla alba*)は水辺から離れた市街地にも多く、近所でもお馴染みでベランダの柵に留まっていたり (6枚目; 窓に近づくと電線に移動。4月末)。人為的な環境に適応しているハクセキレイに比べて、近年セグロセキレイの個体数が減少しているとの指摘もあるそうです。

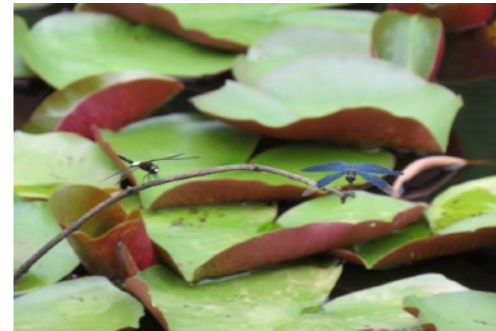


yucca-note 2015.6.24

## トンボ王国



四万十市のトンボ王国。このトンボ王国の生みの親、杉村光俊さんの『トンボの楽園』（あかね書房）、譲二氏が1986年初版を持っていて、たまに眺めてはほぼ30年・・・思いがけず高知に住むことになり、ずっと気になっていたとんぼの楽園を訪れることもできました（6/21）。本来の里山の環境を生かしたほんとうに気持ちのよい自然公園。色とりどり、大小さまざまなトンボたち、とりあえず写真撮れた種類を並べてみました・・・このなかで最大のウチワヤンマ（8cmあまり）、そして最小（2cmそこそこ）のコフキヒメイトトンボ、どちらも初めて見ました。



yucca-note 2015.6.26

## ネジバナ、半夏生、セマダラコガネ、カワセミ（トンボ王国その2）



毎年この時期になると目にとまるネジバナ。強まる日射しのなかで、小さな紅と白の花をたくさんつけて細く螺旋状に伸びる花序がおもしろく、つい足を止めて眺めてしまいます@@。モジズリ（捩摺）というみやびな別名もあるとは今まで知らず・・芝生のような草地で見かけることが多いですが、トンボ王国の観察路沿いの水辺のネジバナは、繊細な糸トンボが似合いそう（キイトンボやコフキヒメイトンボは少し離れたところにいましたが）。初めて見るハンゲショウ（ドクダミ科）、夏至を過ぎた7月初旬の半夏生（はんげしょう）の頃に白い葉をつけることから名付けられているようですが（この日はちょうど夏至前日）、マタタビとドクダミを合わせたような真っ白い葉と花穂が目立っていました。

カキツバタ（？）の長い葉の裏に譲二氏が見つけた10mmほどの小さな黒いコガネムシ、よく見ると黒にくすんだ銅色のシックな色合い、体のわりに大きな触角や目がかわいい感じ(^^);。セマダラコガネ *Blitopertha orientalis* の黒色タイプのようなようです（翅のまだら模様は個体差が大きく、真っ黒いタイプもあるとのこと）。

かなり奥まったあたりで、何かがすぐ横をかすめて飛び（視野の端に一瞬きらめく青の残像）、巨大なギンヤンマ？と思ったら、カワセミでした。肉眼ではかすかにしか見えませんでした。水路に突き出た枝にとまり、じっと水面を見つめて獲物を探しているようす。残念ながらちょっと画像はぼやけてましたが(++);、はじめて自分で写せたカワセミに感謝。



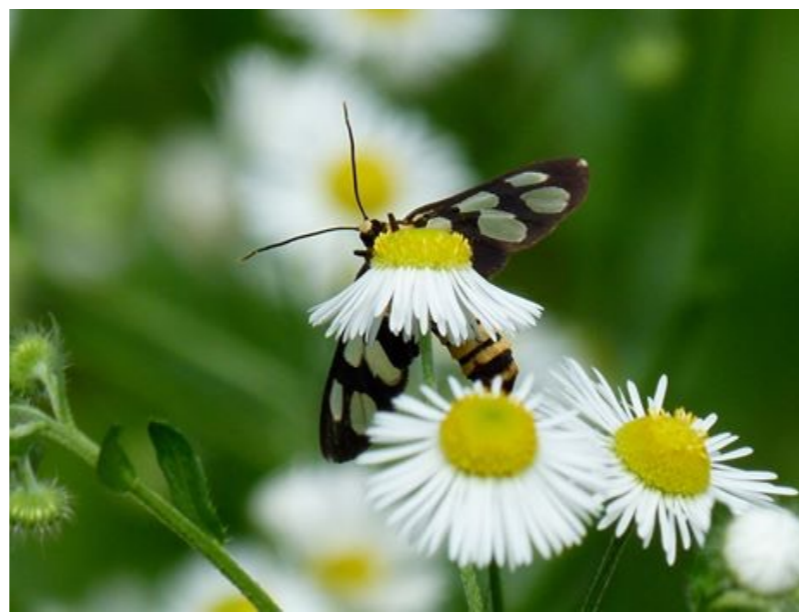
yucca-note 2015.7.1

## キハダカノコ



雨上がりのめだか池散歩 (6/28)。梅雨の晴れ間にしてはずいぶんさわやかな風の吹く昼下がり。池のなかに佇む純白のダイサギは、木陰からそっと見ていたのにさっさと飛び去ってしまいました。近くのヒメジョオンの花に黄色と黒のくっきりとした蛾・・ちょっとなつかしいキハダカノコでした。小学生の頃、住んでいた社宅の団地の前が広々とした空き地で、そこで見つけてはじめて図鑑で調べたのがこのキハダカノコ (*Amata germana nigricauda*)。まずカノコガ (腹部が黒地に2本の黄色い縞) を図版で見つけ、その後母が解説文欄外の注釈に気づいて、よく似ているけれど腹部が黄色で数本の黒い縞があるのでキハダカノコ、と。

昼行性の蛾でいろいろな花で吸蜜、黄色と黒の目立つ色彩は蜂に擬態しているとも言われるようですが、黒地に白く透ける翅の紋様は名の通り鹿の子絞りのようで、風に揺らぐヒメジョオンの花に粋な彩りが添えられたような・・近くに足に花粉を集めたミツバチもいました。

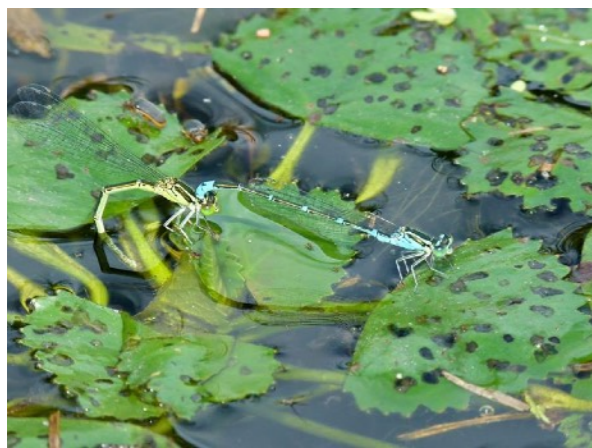


## オオイトトンボ産卵・ハグロトンボ



梅雨の晴れ間のめだか池(6/28)、水辺では複数のギンヤンマがきらきらと飛び交い（飛び続けて留まらない~~;）、イトトンボたちが水中に連結産卵していました。青みの強いオス♂と黄緑がかったメス♀、オオイトトンボ（*Paracercion sieboldii*）のペア、よく見ると何組も。「オオ」とつきますが、体長3cmちょっとくらい（糸トンボとしては普通サイズとのこと）。水中の茎の内部に産卵、状況によっては水中に潜って潜水産卵することもあるというのも驚き。ドイツ語でトンボはLibelle（<ラテン語のLibra 秤→てんびん座）のほか、水の精を連想させるWasserjungfer（水の乙女、水の娘）の語もあるようですが、イトトンボにとくに似合う呼び方に思えます。

池の周囲の道にいたハグロトンボ（*Atrocalopteryx atrata*）♂、こちらは6cmあまり(カワトンボ科)。地面に留まったまま4枚の翅をリズムカルに開いたり閉じたり。高知県では「仏とんぼ」「神様とんぼ」などと呼ばれるとか（私は昔オハグロトンボーお歯黒とんぼ、とってたような）。色合いも薄闇、薄暗がりのイメージですが、ちょうど日が当たって、金属光沢の色合いや翅脈の精妙さに見とれました。



yucca-note 2015.7.7

## チョウトンボの光芒



曇り時々小雨のめだか池。色とりどりのアジサイは大半が花盛りを過ぎ、ネムノキの花も薄曇り色。池の葦の上をひらひらと飛んでいたチョウトンボ、眺めていると飛んできて、葉の上に留まり、広げた翅のメタリックな光沢を見せつけるようにゆらゆら、金色～緑金色にきらきら・・・今までに近くで見ることのできたのは、ほとんど紫藍というのか青から紫がかった光沢だったので（先日四万十市の「トンボ王国」で見たのも、岡山にいたときに自然保護センターなどで見たものも）、この金緑色の煌めきは何とも新鮮・・・青紫の光沢はオス♂、金色がかった光沢はメス♀のことが多い、という説明もありますが、この個体はどうも♂のようです。

どちらも魅惑的、青系はかすかに紅色、金色系はオレンジがかった色まで含み、黄銅色から青～紫に変化するという斑銅鉱の虹色光沢など思い出します。斑銅鉱（銅と鉄と硫黄）、硫黄で変容する銅や鉄の夢想・・・

1,2枚目：7/5 めだか池

3枚目：6/21 四万十市トンボ王国



yucca-note 2015.7.9

翡翠 *Alcedo atthis*



めだか池でもカワセミに会えました・・・！(7/5)水面に伸びたゆらゆら揺れる葉の先のトンボを写そうと苦心していたら、その下側をかすめて背を見せて低く飛ぶ2羽。翼の中心で輝くコバルトブルーの眩さ。少し先の岸の枝に留まったのを何とか見失わず、水面をしばらく窺ってからジャンプ、また枝にもどってくるようすもわかりましたが、その直後飛び去ってしまいました。画像は譲二氏撮影（私のはぼけぼけ〜;）。最初の2枚が上の枝にいたたぶんオス♂（このあと水面にジャンプ）、3枚目が下の枝にいたたぶんメス♀（あまりはっきり見えませんが、嘴の下側にかすかに赤みあり）。そういえばギンヤンマやオオイトトンボのきらめく青もカワセミの背の色合いに似ているように思えます。

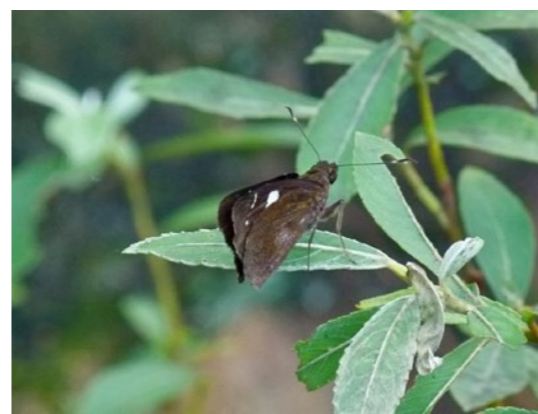
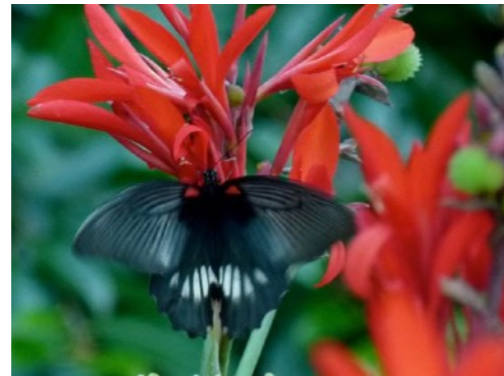
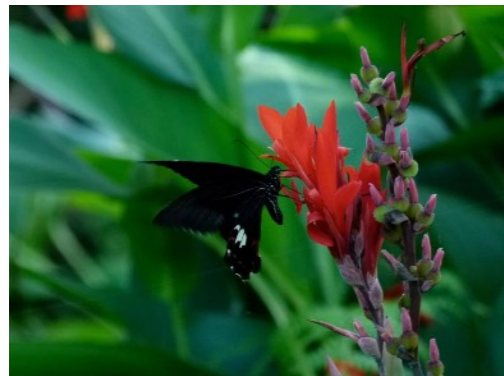




## 雨後の蝶たち



台風後の牧野植物園 (7/18)。久しぶりの晴れ間、いろいろな蝶が飛び交っていました。入り口の土佐の自然生態園でまずカラスアゲハ (*Papilio dehaanii*)、強風の後だからか、少し翅に欠損、葉でしばらく静止した後、上のネムノキの花へ。丈の高い植物は風で倒れかけたりしていましたが、季節ごとにさまざまな薔薇やユリ、カンナなど華やかなコーナーでは、赤いカンナが咲き揃い、黒いアゲハたちの飛翔乱舞・・・！モンキアゲハ (*Papilio helenus*)、ナガサキアゲハ (*Papilio memnon*) などなど、めまぐるしく飛び交い入り乱れながら吸蜜、動きが速くてなかなかピント合いませんでしたが (@@;) 炎のような花に黒いアゲハが群れ飛ぶのは壮観、居合わせた若い人たちもしきりに携帯で撮影してました。帰り際に土佐生態園で初めて見る黒っぽいセセリ蝶。水面に傾いたユリの近くにひっそりと。翅を開くと白い斑。クロセセリ (*Notocrypta curvifascia*) のようです。大きな目が愛嬌あるセセリたち、超地味だけど今まで見たことのない種類に会えるとちょっと嬉しい。。

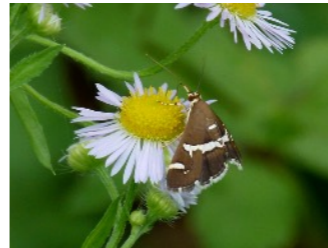
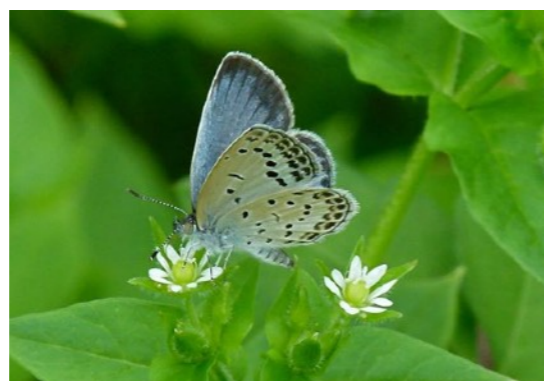


## めだか池の虫たち



雨続きの高知です・・・梅雨のめだか池で見た虫たちです  
(7/5)。小雨の中、蝶や蛾は活発に飛び回っていました。  
アオスジアゲハは地面で吸水。ヒメジョオンの花にはおなじみのベニシジミやヒメウラナミジャノメが多数、ときどきミツバチ。はじめて見るコチャバネセセリは、腹部の縞模様と翅裏の濃い色の翅脈が粹な感じ。  
市街地にも多いヤマトシジミ、ハコベの花で吸蜜、少し翳った青の魅惑。朝に羽化したらしいトンボ（マユタテアカネ？）はじっと動かず、翅はもう伸びていましたが、翅脈もほとんど目立たず透き通り、数時間後も同じ姿勢。

2週間後(7/19)。ヒメジョオンの花にいた小さな蛾はシロオビノメイガ、幼虫はホウレンソウを食べたりするようですが、三角の翅がマント姿の妖精めいていて見飽きません・・・前にヤマトシジミのそばにいた小さなカメムシ（譲二氏発見7--10mm）に再会（^^）、菜（ナ）を食べるカメムシだからナガメ、とのことですが、赤と黒の不思議な仮面のよう。

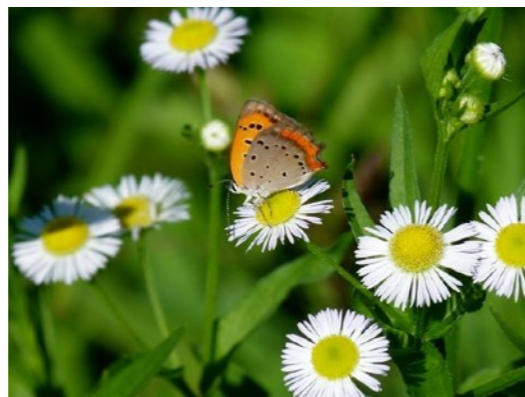


yucca-note 2015.7.27

## めだか池の虫たち～その2（梅雨明け）



昨日は台風の影響で風雨もありましたが、土曜日（7/25）のめだか池は梅雨明けの夏空の下で輝いていました。風が吹き渡り、空を映し光を吸いこんでいるような水面と植生の緑が何とも美しく、暑さも少し忘れるほど・・・先週雨の中ではじめて見たアオモンイトトンボは同じ場所に、今度は複数見かけました。日当たりの良い道沿いの草の葉にいたセマダラコガネ、前に見たのは黒色タイプでしたが、今回は茶色に斑模様の標準タイプのようなようです（大きな触角と目がやはり愛嬌あり）。黒っぽい胴体にビーズ玉のような青が映えるクロイトトンボなど、小さな虫たちもそれぞれに光を宿しているように見えます・・・



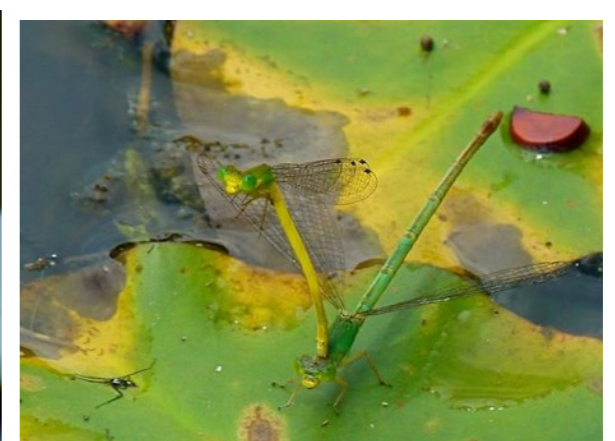
## 真夏の午後の蜻蛉たち（ギンヤンマ、ベニイトトンボ、キイトトンボ）



一瞬すぐそばに来て、いつものようにきらきらと飛翔し続けるギンヤンマ、いつかは近くでじっくり見せてもらえるかな、まあ焦らずに・・・などと思っていたら、その日のうちにかかなり間近に見ることができました・・・！（8/2）猛暑続き、どうせ暑いなら（～；）、と出かけたさらに南のトンボ王国。木陰を通りながらゆるゆる散策、いろいろなトンボたち、飛んでいるギンヤンマもたくさん見て、そろそろ帰ろうかという時、つながって飛んできたギンヤンマのペア、最初少し離れた水面に降下するもすぐにまた飛び、しばらくの池の上を飛び回った後、近くのスイレンの葉の上に降りてそのまま連結産卵。真夏の遅い午後の静寂のなかで、若草のような浅緑の体色、♂の腹節の付け根は輝く明るい青（天河石＝アマゾナイトなど連想）、♀は白銀の煌めき、植物や鉱物の色を何とも絶妙にまとったような美しい生きものの営み・・・1メートルそこそこの距離で数分間、なんとも贅沢な時間。近いので私もあまりぶれない画像撮ることができました。

水辺の足下近くにはベニイトトンボも複数いて、こちらもペアで産卵。ここで初めて見た赤いイトトンボ、イトトンボというと青系や草色のイメージだったので、全身赤い（透明感のある茜色）イトトンボにびっくり。絶滅危惧種とのことですが、去年と今年、岡山県玉野市や倉敷市でも確認されているようで、ちょっと嬉しくもあり（去年の夏は岡山県の鯉が窪湿原やヒイゴ池湿地で小さなハッチョウトンボなど見てました・・・）。

キイトトンボは比較的どこでも見られる種類ですが、数年前まで私は見たことがなく、鮮やかな黄色（♂）に驚き。最近はずっと細く小さなイトトンボを見るので、キイトトンボはけっこう太め、と感じるようになりましたが（@ @；）。黄色い♂と緑色の♀の組合せも綺麗な、周囲に溶け込む色合い。



yucca-note 2015.8.9

## ギンヤンマ♀の単独産卵



ギンヤンマ♀の単独産卵です（譲二氏撮影）。遠雷の響くめだか池にて。ここでもいつもギンヤンマたち飛び交っていましたが、いつものように浮き橋で水面を写していた譲二氏の周辺で産卵。私は岸でウリハムシなど写してて間に合わず（・・・；）。翅が濃い褐色にけぶるのは、いわゆる老熟した♀の特徴とのこと、ゆらぐ水面に映る影も雰囲気あり・・・

学名Anax parthenope julius のparthenopeパルテノペというのは、古代エトルリアで崇拝されていたというセイレンたちのひとりの名（ネアポリス＝ナポリの処女の意）のようですが（カール・ケレーニイ『ギリシアの神話』中公文庫など）、セイレンというのも、鳥の姿、魅惑的な声で誘う水の精、詩芸を司るムーサイ（ミューズ）といった要素が混ざり合っているようで興味深いです。



yucca-note 2015.8.17

## サルスベリ (百日紅)



実家のサルスベリ、冬に枝を刈り込んだからかどうか、ここ数年で一番の見事な花つきでした(画像1,2枚目)。子どもの頃に初めて見たとき、鮮やかな色合いのフリルのような花が珍しくてびっくりしたのですが、あらためて眺めてみて、小さなお手玉のような、折り紙細工のような蕾も面白く、ひらひらと薄く繊細な花弁を開き、桃紅色の簪みたいな円錐形の花房をなして伸びるのは、夏空に次々に放射する真昼の花火のような。湾曲する幹の、確かに猿も滑りそうなたつたつした白っぽい木肌。中国原産で渡来は江戸時代以前とも言われ、百日紅の名は、花期が長いことから来ているそうですが、リョウブやナツツバキ類もよく似た樹皮で、この木が渡来する前は、ヒメシャラやナツツバキがサルスベリと呼ばれていたとか。白い花のサルスベリはとても涼やか。高知市内には、白花のサルスベリの並木通りもあって魅力的です。画像は日高村のメダカ池のほとりのもの(3,4,5枚目)。5枚目の一段濃い紅色の花はいかにも南国的。



yucca-note 2015.8.20

## 白ゆり、羽黒、黒木間に数珠の玉



雨のめだか池(8/16)。お盆前頃から目につき始めたタカサゴユリ、そこかしこで白い花が清々しく際立ってました。台湾原産の外来種で各地で野生化しているとのこと、空き地や高速道路の法面などでもたくさん咲いているのをよく見かけます。外側に少し紫がかかった線の入る細長〜い花と繊細な葉。水辺では、お馴染みになったハグロトンボが多数。濡れた緑の上で♂のメタリックブルーの胴体と黒光りする翅が艶やかでした。譲二氏が葉陰に見つけた朽ち葉のような蝶は、ぼんやりと図鑑で見覚えのあったクロコノマチョウ（黒木間蝶 *Melanitis phedima*）。地味な色合いですがわりと大きめ、翅裏にごく小さな白っぽい点々（眼状紋）。幼虫の食草はジュズダマやススキなどイネ科植物だそうで、そう言えば月初めにここで久しぶりにジュズダマを見て、子どもの頃つやつやした固い実を糸に通して遊んだりしていたのを思い出したりしていたところ。まだ青々した状態のジュズダマはあまり記憶になく新鮮。学名の「ヨブの涙」*lacryma-jobi*とは、何とも意味深、涙のような実の形からなのか、旧約聖書のヨブの苦難とジュズダマの薬効とかいろいろ連想させられます（ハトムギはジュズダマの栽培種とも言えるそうです）・・・



## スミナガシ

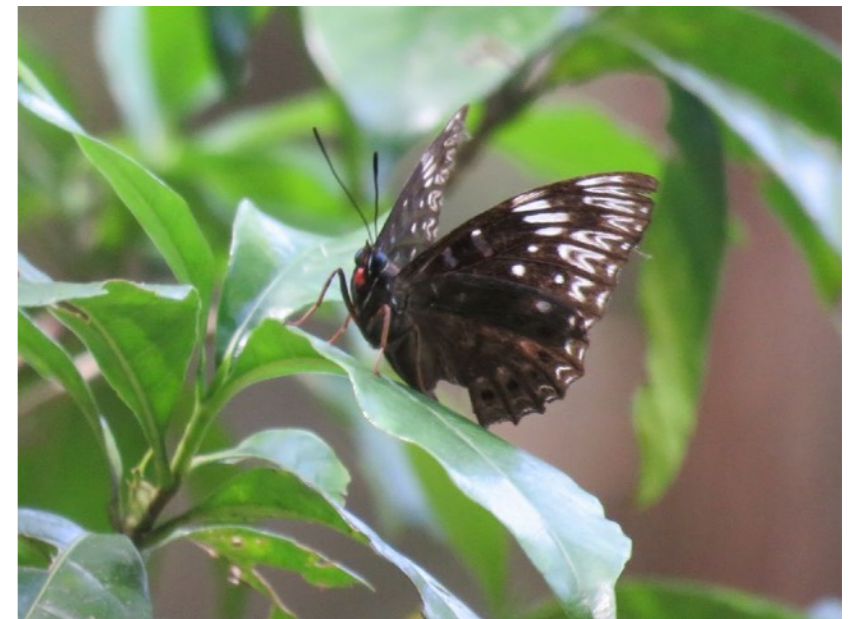
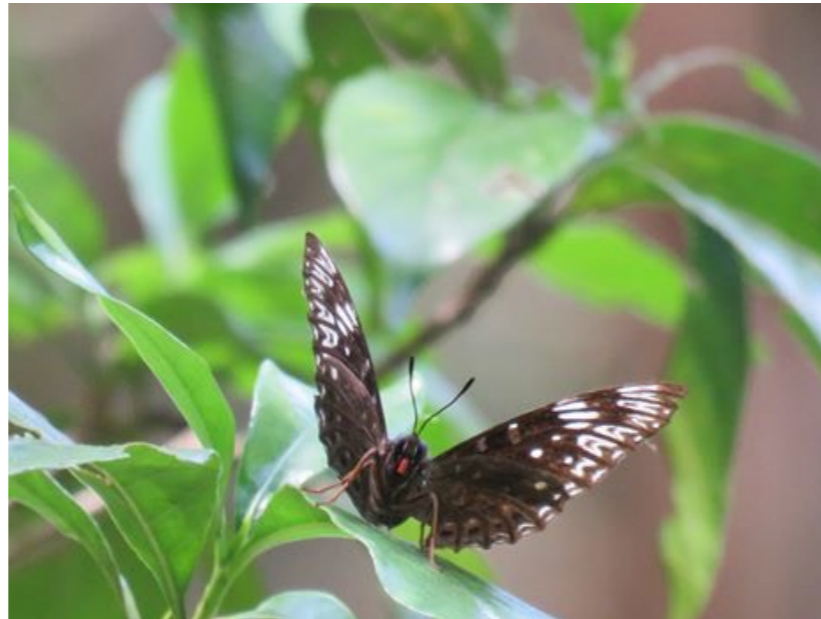


前から気になっていたスミナガシ (*Dichorragia nesimachus*)、はじめて実物を見ることができました。四万十トンボ自然公園の奥まった林の中、シダの葉の上で黒っぽい翅を広げてじっとしているのを譲二氏発見。墨流しというのは、水面に墨汁や顔料と油を交互に垂らしてできる流紋を紙や布に写し取る染めの技法のひとつで、もとは平安時代の宮中などで水面に墨を流しその模様を見て楽しむ遊びから来ているそうなのですが、確かにそんな雅な墨染めを思わせる深みのある色合い。青い光沢のある後ろ翅は夏の夜空の銀河か、ブラックオパールの煌めきのようにも見え、翅を縁取る秘密文字みたいな白い文様も面白く、驚いたのは真っ赤な口吻・・・！抑えめの色調のなかでひときわ目立ってました。シダから飛んで頭上の木の枝に留まった時に見えてびっくり (@@)。

幼虫の食草(食樹)はアワブキ、ヤマビワ、ミヤマハハソなどアワブキ科の木とのことですが、ちょうど去年のこの時期岡山県自然保護センターで見たアオバセセリも同じ食草だそうで、そういえば青い光沢の黒っぽい翅が似ている感じも・・・アワブキの名前の由来は枝を燃やすと多量の泡が出ることかららしく、初夏に枝先に多数集まって咲く小さな花がクリーム色の泡のように見える(中国では泡花樹と呼ばれるとか)そう、注意して見てみたいと思います。

薄暗い木陰で画像クリアではありませんが、写せてよかった・・・

8/23 1,2枚目：土居由加      3,4枚目：土居譲二



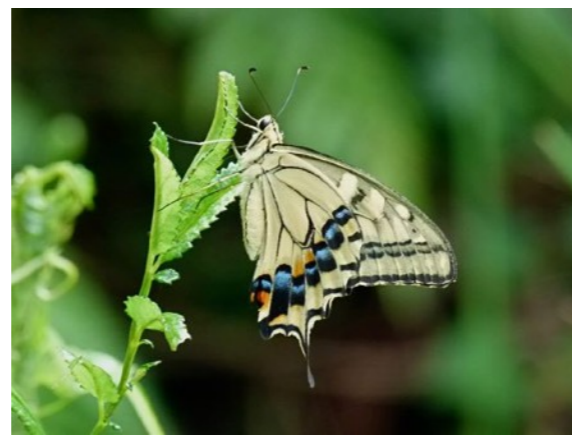


豹紋、揚羽、羽衣。



月初めから咲いていたとはいえ、この時期オミナエシの花を見ると、やはり秋の気配を感じます。光に溶け出しているようにも見える 密集する小さな黄色い花に、明るいオレンジ色のツマグロヒョウモンやレモン色のキアゲハが次々に飛んできては吸蜜（牧野植物園薬草園にて）。植物生態園のボタンボウフウ（オミナエシに似た白花）にはたくさんのキアゲハの幼虫（鮮やかな縞々！説明板もあり^^）。画像は水辺の草の葉で静止していたキアゲハ成虫。幼虫の近くには、初めて見るスケバハゴロモ。去年はじめて確かベッコウハゴロモを見て、小さなセミのような蛾のような姿にびっくりしたのですが、スケバハゴロモは名のごとく翅がきれいに透き通り、斑紋がゆるキャラの顔みたいにも見える不思議な虫。体長1cmほど。ハゴロモの仲間は熱帯に多く、以前メーリアンの昆虫画などで見たテングハゴロモの印象は強烈でしたが、小さく目立たない日本のハゴロモたちも気づいてみればなんとも不思議。

画像 8/22



秋雨・彼岸花・セセリ・オオスカシバ



土曜日のメダカ池。雨降り止まず、傘をさして狭い範囲をのろのろ散策。池の周囲にもう彼岸花が咲いていました。8月の終わりというのは今まで見たなかで一番早いような気がします。茎が伸びるのと同時に、茎の先の蕾がだんだん膨らみ広がり、伸びきったところで開花している段階的なようすがあらためておもしろく・・・小さなイトトンボや蝶たちが雨のなかでも飛び回っていて、ランタナの花の回りには、秋に増えるというイチモンジセセリが多数。一番ポピュラーなセセリだけれど、ちょっと野ウサギみたいにも見える表情でひたすら吸蜜しているのがかわいくて眺めていると、オオスカシバ（*Cephonodes hylas*）も飛んできました。むかし小学校低学年の頃、学校の花壇で、羽ばたく音はするのに透明な翅はほとんど見えず、黄緑に赤や黒の鮮やかな芋虫が空中に浮かんでいるように見えてびっくりした記憶。羽化した直後の翅は鱗粉で覆われ、動きで鱗粉が落ちて透き通った翅になるというのは最近知りました。わりによく見かけるものの、数秒ほどホバリングしては飛んでいくので、なかなか写せず・・・顔はカエルっぽくて愛嬌はあるけれど、学名のヒュラス（*hylas*）というのはヘラクレスに愛された美少年の名なのだとか(\*\*)。幼虫はクチナシの葉を食べるそうで、ちょっと麻酔的な甘い香りのクチナシの花のイメージ??

画像8/29



yucca-note 2015.9.4

## 逆立ちトンボたち



きょうは久しぶりに晴れ、かなりおとなしい鳴き方になったとはいえ、ミンミンゼミやツクツクボウシの声もまだ聞こえていました。ひと月前のすさまじい暑さ (><;)の記憶も徐々に薄まってくるような日々ですが、夏の思い出に、一番暑かった頃のトンボたちの画像をいくつか・・・逆立ちしてるのは、気温が高い時、体に当たる太陽光の量を減らすためだそうで、8月初めはよくこの逆立ちトンボを見かけました。真紅のショウジョウトンボ♂とシオカラトンボ♂のツーショット、チョウトンボ、ウチワヤンマ、ミヤマアカネ♀など。お正月の羽根つきの羽根は、もとはムクロジの木の実に鳥の羽をつけたもので、これをトンボに見立てているというのは初耳でしたが、確かにいっばいに広げた翅と輝く丸い複眼は、羽根つきの羽根のイメージも・・・トンボに見立てた羽根を羽子板で突き上げるのは、蚊を食べてくれるトンボの力で、病気を媒介する蚊を追い払うまじないであったという説はとても興味深いです（『トンボ入門』新井裕 {どうぶつ社} によると、日本の習わしの由来を記した室町時代の『世諺問答（せげんもんどう）』という書にそういう説明があるそうです）。

※世諺問答 天文13（1544） 一条兼良（かねら）兼冬（かねふゆ） 著



yucca-note 2015.9.7

## 熟すジュズダマ、アオモンイトトンボ



メダカ池のジュズダマ、実が鈴なりにになって3週間よりずいぶん色づいてきました。堅く艶のある黒褐色、たしかに数珠の玉。葉はトウモロコシに似た感じ。足下の草にほとんど紛れるようにアオモンイトトンボ。こちらに来てはじめて知ったイトトンボです。胸部が緑がかって腹部の先が青い♂は何度か見ましたが、胸のあたりがオレンジがかった未成熟メス ♀は先週はじめて見て、今回やっとそれらしい画像写せました（体長27-35mmで見失ったりぶれたり）。成熟すると全身が褐色からくすんだ緑色になるそうですが、♂とほとんど変わらない色合いの♀もいるようで、やはりややこし(~~;)。4枚目は先週雨のなかでじっとしていた♂。

画像 9/5 4枚目のみ8/29



yucca-note 2015.9.9

## ホテイアオイとギンヤンマ



この夏は、あまりきれいな青空を見ていないような気が。一番暑い梅雨明けの時期は妙に空の色が白っぽく、その後台風続きで晴天自体が少なかったので、この日見上げた空は印象に残っています。8月下旬のトンボ公園、少し暑さも和らいで、トンボたちももう逆立ちせず、薄紫のホテイアオイの花が咲き揃う池ではギンヤンマが飛び交い、複数のペアが水面近くの葉の間に次々に連結産卵・・・こういう時でないとしっくり見られないギンヤンマなので、ついつい写してしまいます。艶のある丸い葉が重なるなかで、ほとんど葉の色と同化しそうな明るい緑のトンボたち、複眼は透き通ったかんらん石（オリビン）のようで、♂の青色部分は水色というか空色というか、トルコ石かアマゾナイト（天河石）か・・・？

羽化前にヤゴとして水中で長い時を過ごすトンボたちと、水面に葉を浮かせ夢見るように花開く湿性植物の憧れにも、秘めた結びつきがあるのかも・・・などと晩夏の夢想（妄想）。

画像 8/23



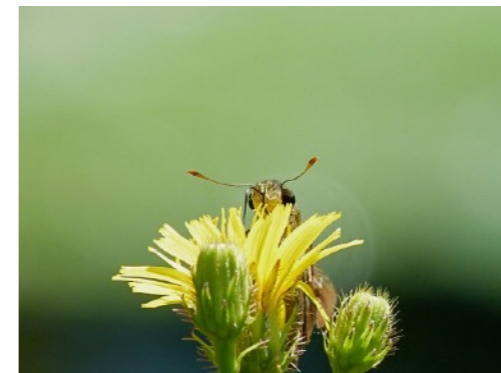
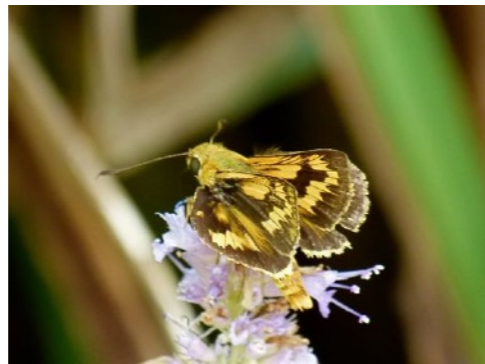
## セセリたち



セセリチョウの仲間は地味～な色合いのものがほとんどですが、少しだけはなやかめ（^^）の三種を続けて見る事ができました。翅裏の地色が明るめで白斑が多いホソバセセリ、黄色と黒の色彩がくっきりとしたキマダラセセリ、黒っぽい地色に大きめの白斑が目立つクロセセリ。安芸郡北川村の「モネの庭・マルモッタン」奥の「光の庭」周辺にて。ホソバセセリとキマダラセセリは以前岡山県でも見たことがあります（蒜山高原や総社市ひいご池など）、クロセセリは7月に牧野植物園で見たのが初めて。よく見かけるセセリ類は幼虫の食草がイネ科（ススキ、イネ、クマザサなど）というのが多いですが、クロセセリはミョウガ、ハナミョウガ、ゲットウなどショウガ科植物とのことで、やはり南方系のようなようです（かつては九州以南にのみ分布していたとのこと）。

画像7枚目はおなじみのイチモンジセセリ。時に大発生し幼虫はイネにつくので害虫とされることも多いようですが、トンボやカマキリ、捕食性のハチや野鳥などに食べられるので、そういうバランスにも目を向けたいところです。

画像9/12



yucca-note 2015.9.17

## はなやぎの？トンボたち



少しずつ秋めいてきて、赤く色づいたトンボも増えてきました。先日の「モネの庭」では、ミヤマアカネやマユタテアカネの茜色のオス♂があちこちに。先の方に帯のある翅が、飛ぶとくるくる回転する車輪のように見えるミヤマアカネ、花壇の花に留まっている♂は華やかでした（2枚目は♀）。乾いた花穂の先のマユタテアカネ♂も綺麗な赤（鼻みたいに見える^^;黒い斑点のあるお顔）。水面に向かって動かないタイワンウチワヤンマ（?）、ちょっといかつい姿がムクゲの花の間に見え隠れ。ベニトンボ♂は、スイレンの蕾で逆立ち、折しも正午近く。モネが自分の庭園で咲かせることを願い続けてかなわなかったという青い睡蓮は、この熱帯スイレンなのだそうです・・・紫に近い色合い。

画像9/12



yucca-note 2015.9.25

## 黄昏れの尾道水道



黄昏れの尾道水道。泳いで渡れそうなほど近い対岸の向島、子どもの頃潮干狩りに行った入江は、造船ドックに立ち並ぶクレーンの西（画像右端）あたり。尾道と向島を結ぶ渡船は、昔は5航路あり、半世紀以上前すでに自動車数台が乗船できる小型フェリーでしたが、架橋などで利用者減少、現在は3航路、尾道駅前棧橋からの渡船は人と二輪車専用になりました。生活に密着した渡船でしたが、最近観光サイクリングで乗船する人が増え、連休など混み合っぴっくりするほど。。画像の船は渡船ではありませんが駅前棧橋の近く、上弦の月のかかる夕空の暮れてゆく色合いと一瞬輝く雲にひかれて。

画像 9/21





yucca-note 2015.9.29

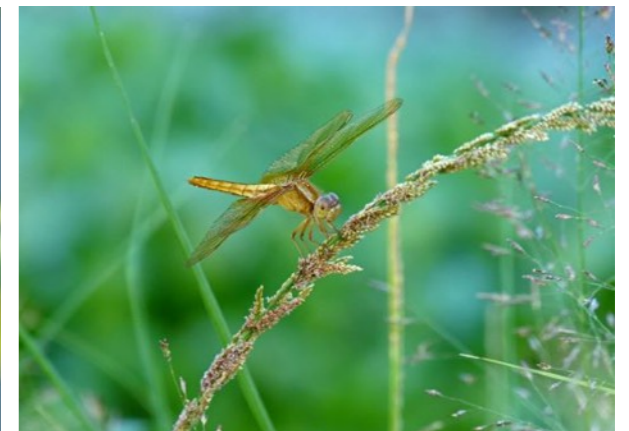
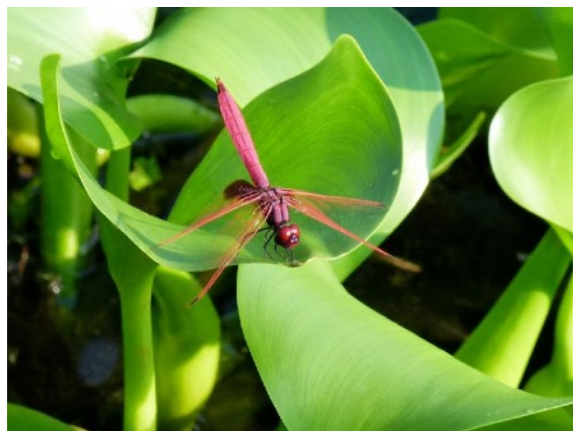
## ショウジョウトンボ・翅まで紅色ベニトンボ



南国市の石土池、住宅地に近く、道路沿いにもかかわらず、流れ込む川の水も美しくいろいろな生きものを見ることができました。前回（5月末）は池の東側のみでしたが、今回西側の川沿いの散策も気持ちよく（少しぶり返した暑さに心地よい涼風）、川面にはここでもギンヤンマが飛び交い、ホテイアオイやヒシの葉にはイトトンボやショウジョウトンボ。岡山県ではあまり見かけなかったけれど、こちらではもうお馴染みになった真っ赤なショウジョウトンボ（画像1枚目）、少し色合いが違う個体もいるな～とか思って写した画像眺めてて、もしやと思い調べてみたところ、ショウジョウトンボではなく、ベニトンボ *Trithemis aurora* ♂ でした（◎◎；）（画像2-4枚目）。ショウジョウトンボ♂は全身（複眼も）赤でも翅の脈までは赤くならないけれど、ベニトンボ♂は翅脈まで赤く、胸側面に黒い筋あり。前に投稿した「モネの庭」のスイレンの蕾で逆立ちしていたのも、翅脈が赤いのでどうもベニトンボみたいです。もともと九州南部以南でしか見られなかったのが、近年四国南部（海岸に近い河川や溜め池など）でもよく見られるようになったとのこと。翅脈まで赤く染まったベニトンボは日射しのなかで真紅の陽炎のよう・・・ショウジョウトンボ♂が、濃い朱色というか緋色のイメージなら、ベニトンボ♂は少し青みを含んだ紅色という印象を受けましたが、こちらに来てこういう南方系の生きものを見る機会が増えています。

画像9/27

5枚目はススキの穂に留まるショウジョウトンボ



## ホテイアオイ・ヒシ



先週の石土池、ホテイアオイが群生して特に西側ではいちめんの花盛り。夢見るような淡い紫の花が小さな塔のように重なり無数に咲き揃っているのは壮観でした。繁殖しすぎが問題視されたりするようですが、ホテイアオイは生活排水や工業排水に含まれる窒素とリンを吸収する力が強く、むしろきれいな水では（栄養分不足で！）あまり増えないのだとか・・・乾燥させた繊維を編んだかごや家具など商品化されているようで（ウォーターヒアシンズバスケットなど）、写真見ると浮き袋の部分がぼこぼこ目立つ編み目（^^）。こういう利用も一考の価値ありそう。

小さな神社のそばを流れる水路では、ヒシがみずみずしい葉を広げていました。トンボたちがよくこの葉の上で産卵したり休んでたりするのを見て、最近になってああ、これがヒシ、とヒシと納得（° ° ;）。ホテイアオイほどではないけれど葉柄は少し膨らみ、放射状に広がる葉の中心に小さな白い花。先月メダカ池で、角みたいに左右に棘の出た黒い不思議な形のもが浮き橋の上にたくさん落ちていて、最初なんだろうと思ったのがヒシの実でした・・・忍者が逃げるときにばらまく撒きヒシというのは、四本の棘のあるオニヒシの実だったという説も。堅い皮のヒシの実もあく抜きをしてゆでると、果肉はクワイ、レンコンや栗のような食感とのこと、美味しそうです。

[foodslink.jp/syokuzaihyakka/syun/vegetable/hishi.htm](http://foodslink.jp/syokuzaihyakka/syun/vegetable/hishi.htm)

桃の節句の菱餅も、もとはこのヒシの実を粉にして作った餅だったとも。

画像1-3枚目9/27 4枚目9/5

